

Title	B・デヴィッドソン他著 北沢正雄他訳 『南部アフリカ：解放への新たな戦略』
Sub Title	B. Davidson and Others., Southern Africa : The politics of revolution
Author	小田, 英郎(Oda, Hideo)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1980
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.53, No.1 (1980. 1) ,p.135- 139
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19800115-0135">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19800115-0135</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 紹介と批評

B・デヴィッドソン他著

北沢正雄他訳

### 『南部アフリカ』

——解放への新たな戦略——

#### 一

南部アフリカ問題は、現代アフリカ問題の焦点である。南部アフリカは、通常アンゴラ、モザンビーク、ザンビア、マラウイ、ボツワナ、レソト、スワジランド、南アフリカ共和国（以下南アと略称）、ローデシア（ジンバブエ）、ナミビアを包摂する地理的概念であるが、南部アフリカ問題といえば、現在それは南ア、ローデシア、ナミビアにおける少数白人支配から多数（黒人）支配への移行の問題を指すと考えてよい。もともと、一九七〇年代前半までの時期についていえば、前述の三地域に当時のポルトガル領アンゴラ、モザンビークを加えた五地域の問題を、南部アフリカ問題としてとらえる方が正確であった。しかし、一九七四年四月のポルトガル本国にお

けるクーデターを直接の契機としてポルトガル植民地体制が崩壊し、一九七五年六月にまずモザンビークが、ついで同年十一月にアンゴラが独立を達成してからは、「少数白人支配から多数（黒人）支配への移行の問題」としての南部アフリカ問題は、南ア、ローデシア、ナミビア地域のそれに凝縮されることとなつた。しかし、ここに紹介する『南部アフリカ——解放への新たな戦略』は、原著（B. Davidson, J. Storo, A. R. Wilkinson, *Southern Africa: The Politics of Revolution*, Middlesex: Penguin Books）の刊行がポルトガル植民地の独立から僅か一年後の一九七六年であつたためでもあろうが、南ア、ローデシアと並べて、旧ポルトガル植民地における解放闘争の問題も分析の対象のなかに含めている。もちろん、いわゆる南部アフリカ問題が、基本的には脱人種主義革命と脱植民地革命という二つの歴史的課題をいかに果すかという問題である以上、旧ポルトガル植民地における解放闘争を、現在の南部アフリカ問題の有機的な一部として位置づけ、これを論ずることは、有意義である。事実、評者自身も機会をえてたびたび論じたように（たとえは、最新のものでは、拙稿「一九七〇年代における南部アフリカの政治変動と国際関係——南アフリカ、ローデシア、ナミビアを中心として——」、「アジア経済」、一九七九年十二月号）、前述のポルトガル本国のクーデターとそれにつづくモザンビーク、アンゴラ等の独立は、一九七〇年代後半における南ア、ナミビアの少数白人支配体制の動揺と人種差別政策の転換、およびローデシア少数白人支配体制の崩壊の、契機となつたのであり、したがつてその意味でも、本書のような構成をとる

ことは、より広い視野に立つて南部アフリカ問題を把握するといふ、望ましい結果につながるであろう。なお、本書の三人の共著者のうち、第一部を執筆したバズル・デビッドソンはイギリスのアフリカ研究者としてつとに知られている。「エコノミスト」、「ロンドン・タイムズ」、「ニュー・ステーツマン」等の記者をへて、彼は一九五〇年代初期から本格的にアフリカの歴史研究に着手した。数多くの著書のうち、『アフリカの目覚め』（西野照太郎訳、岩波書店、一九五九年）、『古代アフリカの発見』（内山敏訳、紀伊国屋書店、一九六〇年）、『ブラック・マザー』（内山敏訳、理論社、一九六三年）、『アフリカ史案内』（内山敏訳、岩波書店、一九六五年）、『アフリカの過去』（貫名美隆訳、理論社、一九六七年）、『アフリカ革命リギニアの解放』（野間寛二郎訳、理論社、一九七一年）、『アフリカ文明史』（宮本正興、理論社、一九七五年）の七点がすでに邦訳・出版されていることから、その業績に對する信頼度の高さを知らることができよう。第二部の執筆者ジョー・スローヴォは、南アフリカの反体制的白人弁護士で、ANC（アフリカ民族会議）と行動をとるに二度も逮捕され、現在は国外で活動をつづけている解放運動の闘士である。また第三部の執筆者アソニー・R・ウィルキンソンは、ローデシア生れの若手研究者で、ローデシアにおけるゲリラ闘争の分析に実績をもつているといふことである。

## 二

本書の第一部「武力闘争の政治——ポルトガル領アフリカ植民地

における民族解放」(デビッドソン)は、ギニア・ビサウ、モザンビーク、アンゴラの解放闘争とその勝利の歴史の意義を論じたものである。著者によれば、南ア、ナミビア、ジンバブエの場合と同様、ポルトガル植民地においても、平和的な変革が不可能であつたために、「人種差別主義支配者の暴力に對抗する暴力」を「建設的に行使する」かちで、必要な変革が行なわれねばならなかつた。しかし、こうした「対抗暴力の建設的な行使」こそが、ギニア・ビサウ、モザンビーク、アンゴラの独立革命を、アフリカ解放運動史に新たな段階を画する歴史的事象たらしめたのだ、と著者は見るのである。すなわち著者によれば、これらポルトガル諸領の解放運動は「改良主義的民族主義から革命的民族主義へと発展した本物の運動」であり、これら諸領の解放は「前方に鋭い光、つまりアフリカの約四〇の国々が改良主義的民族主義、分離主義的民族主義、従属的民族主義という無能な枠組から最終的に脱出し、その資源と能力を結合し始めることのできるような光を投げかけるのに役立つた」のであつた。

無論ポルトガル諸領におけるこうした革命的民族主義は、突如として登場したわけではない。それは、第二次世界大戦以前の、同化主義受容的な、初期的民族主義に胚胎し、一九四五年以後の「支配者の思想の概念的な境界を乗り越えて進み始めた」新しい政治思想家グループ（民族なき民族主義者）の指導する民族主義の段階、一九五〇年代後半以降の、植民地当局による暴力的弾圧のなかで武装反乱（対抗暴力）に突入していつた段階をへて、最終的に立ち現

われたものである。著者は、ポルトガル領アフリカにおけるこうした革命的民族主義の形成には、二つの重要な流れがあずかつて力あつたと述べている。その第一は、これら民族主義の指導者が「新しい種類の新しいエリート」としての自分たちと、「行動を起こし、それを維持し、たえず意識と闘争の一致を拡大するに十分な大衆」とのあいだの隔りを埋めるよう努めた、ということであつた。

また第二の流れは、「運動を単なる改良主義者の民族主義という発想から、社会の本質にそれとなく変化をもたらし、徐々にそれを規定していくような思想と目的へと変える流れ」であつた。それは、「植民地の独裁政治と抑圧であれ、一夫多妻や長老による支配のような〈伝統的な〉制度であれ、〈それまで存在していたもの〉を疑いなく改革すること」を意味すると同時に、「新しい社会を過去の束縛から解放放つことのできる新しい心構えと組織を作ること」をも意味した。こうしてポルトガル領アフリカの解放運動は革命的性格をもつにいたつたのであつて、外部から革命的教義が導入されたがゆゑに革命的になつたわけではないと著者はいうのである。しかもこうした革命的民族主義にとつての成否の鍵は、大衆の支持だけでなく、大衆の参加をもちとれるか否かである。著者によれば、ポルトガル領アフリカで、大衆の支持のみならず参加をもちとつた真の革命的民族主義組織は、ギニア・ビサウとカボベルデにまたがるPAIGC（ギニア・カボベルデ独立アフリカ人党）、モザンビークのFRELIMO（モザンビーク解放戦線）、アンゴラのMPLA（アンゴラ解放人民運動）の三つだけである。

こうした著者の認識に立てば、PAIGCがギニア・ビサウとカボベルデの、FRELIMOがモザンビークの独立を最終的にかちとつたのはもちろん、MPLAがアンゴラ内戦で勝利したのも妥当な結果である。ただ著者自身もその終章で指摘しているように、独立後の「新たな状況」のなかで、「武力闘争の政治はその〈簡明さ〉を失い、イデオロギー上の内部抗争という新しい局面が始まつた」。これはあらゆる革命が当面しなければならぬ宿命ともいへべきものであるかもしれない。しかし、もともと革命とは、ドラマティックな局面を過ぎて以後の段階にいたつて、真のヤマ場を迎えるはずのものである。ギニア・ビサウ、モザンビーク、アンゴラの革命は、国家建設期にいたつてもなお、独立期のような大衆の支持と参加を、その意味でのダイナミズムを、持続できるのであるか。もし持続できなければ、これら三地域の革命的民族主義は輝きを失い、アフリカ革命の新段階なるものは、視野から遠ざかつてしまふであらう。

第二部「南アフリカ——中間の道はない」（スローウオは、一九七四年四月のポルトガル本国におけるクーデターとそれに続くモザンビーク、アンゴラの独立（一九七五年）以後南アに起つた変化を、批判的に受けとめ、南アの真の解放のための、向うべき方向性を改めて確認しようとしたものである。一般に知られているように、ポルトガル・クーデター以後、モザンビーク、アンゴラといった「白い南部アフリカ」の外壁が崩壊していくなかで、南アの少数白人政権は、悪名高いアパルトヘイト政策を部分的に緩和する一方、パン

ツィ・ホームランドに独立させることによつて、新らたな「白人社会の保存」の道を模索し始めた。著者はそうした少数白人政権の偽瞞性を告発し、真の南アの解放は、被搾取者による暴力的革命以外の方法では達成されえないと述べている。ただその場合、革命は人種の革命というよりむしろ社会主義革命のコンテクストにおいて遂行されなければならない。つまり、階級闘争の延長線上に南アの解放は達成されるというわけである。こうした性格の革命を推進するうえで著者はA N Cと南ア共産党の役割を重視するのであるが、それは著者が前述のようにA N Cに深くコミットしてきたことからして、当然であろう。

ここで興味深いのは、著者が、南アにおける暴力革命あるいは武装闘争の実践可能性について、かなり楽観的な見方をしていることである。すなわち、現在なお少数白人権力は強大ではあるが、武装闘争が長期にわたれば、その労働力によつて南アの経済を支えている黒人大衆は白人に対していつまでも従順で協力的なままではないのであろうし、南アは広大であるから、支配権力が全体を強力にかつ注意深く監視することは著るしく困難である、というのが、その理由のひとつである。無論著者は、単に武装闘争のみをもつて南アの解放が達成されうるといつているのではない。武装闘争は、都市と農村地域での大衆の政治動員と結合することが不可欠であることも、確実に認識している。しかし、こうした武装闘争はいつたい、いつ開始されうるのであろうか。この点については、著者の議論は明確な予測を欠いている。著者は単に、革命が間近に迫っているの

ではなく、「むしろ(革命の)開始のための条件が、今世紀のいかなる時よりも、今日ますます有利になつている」と指摘しているのみである。もつとも、かりに武装闘争が開始されるとしても、その時期を予測しようとすることは、何人にとつても無謀な試みであるかもしれない。ただ、著者が本書で展開した議論の勢い、からすると、そうした予測を欠くことは、いささか竜頭蛇尾の感をまぬがれない。

第三部「ローデシアからジンバブエへ」(ウィルキンソン)は、「ローデシアの政治暴力の発展を、現代的黒人ナショナリズムの出現から今日にいたるまでたどり、次いで南部アフリカ全体の幅広い文脈のなかで、ローデシアの状況を点検する」ことを目的としたものである。この場合、著者の議論の中心軸は「ゲリラ対反ゲリラ」に置かれる。著者は、一九五七―六五年のローデシアを「立憲段階」——合法的な闘争を通じて人種差別の撤廃と多数支配への移行を実現しようとした段階——、一九六六―六八年を、「(黒人)民族主義者たちが十分な準備なしに「公然たる抵抗」という中間段階に進もう」として「陣地戦」に突入し、政府軍に圧倒された段階、と規定し、この時期における挫折から、民族主義組織は、一九六九年以降は大衆の政治化と動員に力点を置き、軍事面では(とりわけ一九七二年以降「小規模で国内に基地を置くグループによる古典的なゲリラ戦法、(奇襲)を採用した」と述べている。そうした時期区分は事実には照して首肯されうるが、別段目新しい主張とも思えない。また一九七二年以降に活発化したゲリラ活動に対して政府がとつた、経済的、行政的、軍事的対抗措置についての著者の説も詳細ではあるが、

ただそれだけのものである。しかし、ローデシアは「独立した移民権力」としての性格をもつが、英国の分身社会 (Fragment society) として成功する可能性に乏しく、むしろ本国の延長であるが、その本国とは事実上英国というより南アである、という著者の指摘は、なかなか興味深い。著者の議論は、一九七五年初期までで尽きているが、その後のローデシア情勢の発展は、著者の展望と、基本的には喰い違う点をもたない、といえよう。

### 三

以上、簡単に本書の概要を紹介した。冒頭に述べたように、南部アフリカ問題は、現代アフリカ問題の焦点である。それはまたアフリカにおける独立革命・脱人種主義革命の最終段階という性格をもつた、重要な問題でもある。しかしながら、この問題の発展がとりわけ一九七〇年代後半以降きわめて急テンポであるためか、事実関係の捕捉、将来の展望などについて、説得力に富む議論が容易に提示されないといった状況がある。そうした状況との関係でいえば、本書を構成する三篇の論説は、時に独断とも思える主張を含みながらも、南部アフリカの歴史的現段階についての、明確なイメージを提供している点で、まことに啓発的といえるであろう。

(一九七九年、岩波書店、一七〇〇円)

小田 英郎